文学の中の「骨相学」

――夢野久作『ドグラ・マグラ』から

鈴木優作

序

骨相学とは、「頭蓋の形をみればその人の性格や精神的特性がわかるという学説で、一九世紀前半の欧米で大いに流行した。創始者はドイツで生まれウィーンで開業していた医師F・J・ガル」[1]である。

近代日本は西洋の科学思想・社会思想を急速に吸収していった。一八七六年から一八八三年にかけて出版された『百科全書』[2]にはすでに骨相学の項目があり、これは「ジューセップゴール氏の発明セシ所ニテ」「各異ノ才知ハ脳ノ各部と相関係」し、「外部ノ記標アリテ之ヲ表示スルナラント」した学であると解説されている。訳者は長谷川泰、幕末・明治の医学教育家である[3]。その後も明治から昭和戦前期にかけての骨相学の名を冠した書物は、現在（二〇一四年四月）国立国会図書館に所蔵を確認できるものだけでも一七点（「骨相」だけならば三一点）あり、人口に膾炙していたことが伺える。

また、イタリアの精神医学者ロンブローゾ（一八三五～一九〇九）による、骨相や顔の形から「生来性犯罪者」を見分ける、犯罪者の医学的・人類学的研究も大正時代に紹介された[4]。

近代日本における骨相学の受容は、その内容を追ってゆくと本来の意味での骨相（脳を収容する脳頭蓋）の形をみるという方法を離れ、顔の形から人の内面を知る「人相術」

と重ね合わされ、より世俗的な知識へと変化していく。そうした俗流の「骨相学」がさらに世界の人種観と混ぜ合わさり、夢野久作『ドグラ・マグラ』に登場する。拙論では『ドグラ・マグラ』における「骨相学」の同時代との相関関係に照準を合わせ、それがどのように生かされているかを論じたい。

『ドグラ・マグラ』は一九三五年一月に松柏館書店から発行された書き下ろし単行本であり、夢野久作畢生の大作である。以下概略。

舞台は大正十五（一九二六）年の九州帝国大学精神病科。「私」は時計の音を聞き目を覚ますが、自分が誰でいつどこにいるのかを思い出せない。隣室からは「私」の許嫁で従妹だという少女が泣き叫んでいる。しばらくすると、法医学教授の若林鏡太郎博士が現れ、その部屋が精神病院の一室であることを「私」に告げる。また、「私」が空前絶後の怪事件に関係しており、自分の記憶を回復することがその事件の解決に繋がっていることをも知らされる。その怪事件とは、従妹と結婚式を挙げる予定であった青年が許嫁である従妹を絞殺したといった内容である。私は何度も意識を取り戻してはまた夢遊状態になるということを繰り返しているらしい。

「私」の記憶を回復させるべく、若林は精神病科内の様々な場所に「私」を案内し、見学させる。「私」は『ドグラ・マグラ』という若い精神病患者が書いた物語を発見する。そして「私」は精神病科の前任者であった故・正木敬之博士の遺した書類に興味を示す。それらは、精神病院はこの世の地獄であるとうたった「キチガイ外道祭文」、「地球表面は狂人の一大解放治療場」なるインタビュー新聞記事、人間が物を考えているのは脳髄ではなく細胞であると語った「絶対探偵小説　脳髄は物を考える処に非ず」という談話記事、胎児は生物が進化してきた過程を夢として母親の胎内で見ており、単細胞から動物、人類の祖先へと至る記憶を細胞に刻み込んで生まれてくるという卒業論文「胎児の夢」、そしてトーキー映画形式で遺した「空前絶後の遺言書」である。

これら一連の正木の遺した文書を「私」が読み終えると、自殺したはずの正木が「私」の目の前に現れる。呉一郎を殺人犯に仕立て上げたのは、自分であると正木は言う。正木と若林は学生時代からのライバルであり、二人は呉青秀という変態性欲の持ち主の子孫を見つけ、その子孫の男子が見ると心理遺伝から殺人を犯すという因縁の絵巻物の存在を知る。正木は若林を出し抜き、一郎の母から絵巻物を

手に入れ、それを使い、一郎に罪を犯させて心理遺伝という自説を証明する。だが一郎は正木の息子であった。「私」は錯乱状態で病院を飛び出し、町を彷徨う。病院に戻ると新聞があり、正木が一カ月前に自殺していたことを知る。「私」は自分が一郎なのか分からないまま、夢遊状態で幾度も同じことを繰り返しているのか、何も解決せぬ混迷の中、冒頭に戻るように時計の音が聞こえる。

一　骨相学と人相術

「骨相学」の登場する場面は、正木の「空前絶後の遺言書」の一部である。遺言書には、「大正十五年十月十九日の正午」に解放治療場の「十人の狂人たちの中から、思いもかけぬスバラシイ心理遺伝の大惨劇（呉一郎が鍬で患者ら五名を殺傷・稿者注）が爆発」して、「正木先生を自殺の決心にまで逐い詰める事に」なった次第が述べられている。その事件の犯人・呉一郎の骨相学的解釈を正木が試みるという場面である。

ところで此の事件の内容に立入まするに先立つて、何故に事件の主人公の顔を、斯様に大写にして御覧に入れたかと申しますと、ほかの理由でも御座いませぬ。この少年の骨相が、この事件の根本を支配致して居ります心理遺伝と、重大な関係を持つて居るからで御座います。

御承知の通り骨相学と申しますのは、目下のところ、まだ純正な科学とは申し兼るのでありますが、しかし、その中の或る部分々々は、確かに実際と一致することが判明致して居りますので、…（略）

「心理遺伝」とは、「人間の精神とか霊魂とかいうヤツは要するに、その先祖代々の動物や人間から遺伝して来た、いろいろな動物心理や民衆心理などの無量無辺の集まり」だという正木博士の学説である。また正木によれば「人間の骨相といふものは、その先祖代々の血統の縮図」であり、「又、或る一人の性格といふものは、その人間の先祖代々の精神生活の凝り固まりとも考へらる」。従って骨相から先祖の血統を読みとり、いかなる心理遺伝を受け継いでいるかが分かるのである。つまり、「心理遺伝」という作中の理論を現実の骨相学で側面から支えているのである。

また、「御承知の通り……」とあることから骨相学がそのように「純正な科学」とはいえなくとも通俗科学として常識の範囲内にあったことが推測できる。

当時の「骨相学」は人相術と重ね合わされ、より世俗的な知識として流布していた。例えば、佐々木高明『骨相人

相術講話』（三星社、一九二〇）の目次には「上停相訣　中停相訣　下停相訣　血色相訣　眼目相訣　眉毛相訣　財帛相訣　法令相訣　人中相訣　口唇相訣　両耳相訣　頭頂相訣　結喉相訣」といった、脳頭蓋だけでなく顔面頭蓋も含む世俗的な「骨相学」と並んで「夫婦離別の相　三赤相訣　父母の死を知る相　火難の相　盗難の相　公難の相　水難の相　溺死の相　生国を離るる相　病人の相　散財の相　運気を観る相」とあり、単なる人相占いが同列に論じられていたのである。同じようなことが高山黙泉『神秘人相と骨相学』神宮館、大東社、一九三五）にも言える。これは佐々木高明の書とほぼ同じ目次内容であり、これに「家相と方位」「九星」という目次がさらに加えられている。この書は同内容のものが異なる出版社から出版され、一九三七年にも再版されている。

当時の新聞記事にもこうした骨相学と占いの結びつきは見てとれる。一九三〇年一〇月二七日の『読売新聞』の夕刊には、柴原剛治著『運命判断骨相の神秘』（実業之日本社）の広告が『生れ月の神秘』『手相の神秘』『恋愛の神秘』『人相の神秘』『姓名の神秘』『家相の神秘』『方位の神秘』と同枠で掲載されている。相乗効果を狙ったのだろう。また、広告欄以外でも、芥川龍之介と大仏次郎の人相を論じた「顔による運命判断」[5]、同じく著名人の人相判断記事「観相学から観たショウ翁」[6]「観相学から観たヒットラー」[7]や、「顔による運命判断」[8]などを挙げることができる。これらは「骨相学」とは称していないが、顔から人の性格を推し量ることへの人々の興味が感じられる。

二　骨相学と人種観

さて、一郎の「骨相学」的特徴として指摘されるところは、以下の通りである。彼は「色々な人種系統の特徴」の「取り合はせ」として描かれている。

・「この少年の血色が、日本人としては白すぎる事」
・「蒙古人種（モンゴリア）系統を代表致して居りますのは、素直な、黒い髪毛の生え際と、鼻の中の内部の形」
・「顔の形は拉甸（ラテン）系統のふくらみを持つた卵型」
・「眉と、睫毛が、絵筆で描いたように濃く長くて、眼の縁の隈がドコとなく青ずんで見えまするところは、何といつてもアイヌ式」
・「鼻の外見的な恰好は純然たる希臘型」
・「頬から腮（あご）へかけての抛物線と、小さな薄い唇が、ハツキリと波打つてゐる恰好を見ますると、我国の古い仏像などに残つてゐるアリアン系統の手法を聯想させます」

・「腮の中央に、北欧人種式の凹み」
・「純拉甸型の薄い腮を持つてゐる」

これは同時代に骨相の人種的特徴を見分ける書も日本で出版されていたことと関係があるだろう。例えばセヴァーン『骨相学』（漱文堂、一九二一）。同書の「第十四章　国民的頭脳」には、「英蘭人（イングランド）の頭」「蘇格蘭人（スコットランド）の頭」「愛蘭人（アイルランド）の頭」「仏蘭西人の頭」「独逸人の頭」「猶太人（ユダヤ）の頭」「米国人の頭」の特徴がそれぞれ紹介されている。呉一郎は中国の一千百年前の画家・呉青秀の子孫であるばかりでなく、様々な人種の「取り合はせ」だということを説明するために、同時代の読者に親しみやすい通俗科学を持ち出してきたのだ。

三　呉一郎の骨相

骨相学の書だけでなく、同時代の外国人についての言説を参照すると、一郎の「人種系統の特徴」との共通点がある。そこで、三―一では呉一郎の外見的特徴（骨相）、それに対応する性格を引用し、同時代言説との比較をしたい。そして三―二では骨相と性格が対応している部分について、続く三―三では骨相のみに注目している部分を見ていく。

三―一　骨相と同時代言説

この「骨相学」の登場場面で語られる人種的特徴の解釈の中には、同時代の外国人や他の人種に対するイメージと相通じているものがある。

例えば、「眉と、睫毛が、絵筆で描いたように濃く長くて、眼の縁の隈がドコとなく青ずんで見えまするところは、何といつてもアイヌ式で……」という外見的特徴から導かれる、「アイヌ式の尊崇心」を「持つている」という解釈について。『読売新聞』（一九三一年三月二五日朝刊）「金田一京助氏の偉業」には、「アイヌは祖先を崇拝する観念が強いので……」とあり、当時、アイヌに対する「尊崇心」「崇拝する観念が強い」というイメージがあったのではないか。

また、「こゝろもち薄い腮の中央に、北欧人種式の凹みがあり「どことなく北欧人種式の隠遁的な、高雅な気風によつて包まれて」いるという。『神話伝説大系　第五巻』（松村武雄編、近代社、一九二七）の中で、神話を素材に北欧人の性質を論じた箇所がある。

北欧人の性情的特色は、忍耐力が強く、冒険的戦闘的精神に富み、不屈の勇気と剛健の気象とに豊かに、また彼等が仰ぐ大空の常に惨として悲しめるやうに、沈

痛厳粛であつて、そして時としては、それが粗剛となり凄惨となり、時としては貴むべきheroismとなり、grandeurとなつた。

「厳粛」“grandeur”（崇高・荘重[9]）など、本文中の「高雅」に近い説明が見受けられる。

そして「一面に極めて楽天的な、呑気な処がありながら、チョットした刺戟や、僅かな環境の変化にもすぐに感激昂奮して、あたり構はず笑つたり、泣たり、怒つたりする……一口に申せば極めて気の変り易い、仏蘭西人みたいな性格」も持っていると語られる。セヴァーン『骨相学』「仏蘭西人の頭」には、「気質に於ては仏蘭西人は多血質にして、熱情に燃え多情多感である。智性に於ては彼は観察に敏速に、鋭利鮮明強烈にして弁別に富む、彼は興奮による外は固執を欠く。彼は不断の努力によるよりも圧倒的勢力の急激なる発表によりて目醒ましき事業を遂行する。」とあり、正木の骨相学的解釈と一致している。

骨相学上の特徴が明確に描かれていないが、「日本人式の順良さ」という性格は、『世界人種風俗大観』「日本人の特性と文化」（中摩照之編、新光社、一九三一）にある「日本人は可動性に富み、適応性に富み、勤勉にして忠実に働き、愛情に富んで家族の紐帯固く、それを拡大して国家を建設し建国以来約二〇〇〇年間、曾てそれを改変しなかつた。」という説明と同様に見てとれなくもない。

三―二　骨相と性格の対応

他にも、一郎の骨相の各部を人種的特徴として捉え、その人種がもつ性格と結びつけている部分がある。

「此の少年の骨相の中で、純粋に蒙古人種系統を代表致して居りますのは、素直な、黒い髪毛の生え際と、鼻の中の内部の形だけであります」とあり、そこから一郎には「大陸民族式の、想像も及ばない執拗深刻、且、兇暴残忍な血」が「内部に潜み流れて居り」、「空前絶後的な怪事件の真相と申しますのは、要するに此の少年の鼻の中に隠れて居りました蒙古人種系統の心理遺伝が、一時に暴れ出したもの」とまで述べられている。

また、「大体の顔の形は拉甸系統のふくらみを持つた卵型で」、ここから「拉甸人種式の頭の良さ」を持っているとされる。一郎は「日本人式の順良さと、アイヌ式の尊崇心と、拉甸人種式の頭の良さとを同時に持つて」おり、要するに「年齢の割に落ち着いた、物静かな性格」「表面的に真面目な性格」だという。それらと「内部に潜」む蒙古人種系統の「凶暴残忍な血」が対置されている。

三―三　骨相への注目

骨相に注目した部分はまだある。

「此の少年の血色が、日本人としては白すぎる」、「その皮膚にあらはれた日本人独特の健康色の下を流るゝ透明な乳白色は、明らかに白皙人種の血が、この少年の血統に交つて居ることを推定させる」、「所謂胡人と称せられて居るものゝ血が加はつてゐた[10]」とある。

他に、「鼻の外見的な恰好は純然たる希臘型」、「頬から腮へかけての抛物線と、小さな薄い唇が、ハツキリと波打つてゐる恰好を見まするとと、我国の古い仏像などに残つてゐるアリアン系統の手法を聯想させます」、そして「純拉甸型の薄い腮を持つてゐる」ということも述べられている。

こうしてみると、顔の形から目鼻立ち、唇に腮、はては血色に至るまで、実に広い意味で「骨相」という言葉が使われている。骨相学が通俗化してきた時代を反映しているといえよう。

結　語

作中で「心理遺伝」の発現によって一郎は殺人事件を起こす。この「心理遺伝」は「精神の奥底の深いところ」にあり、「どうかした拍子」に突然表面化する。一郎の場合は、呉家に伝わる因縁の絵巻物（祖先・呉青秀が玄宗皇帝の乱心を諌めるため、妻を縊りその死体の腐ってゆくさまを描いたもの・稿者注）を見ると、死体を求める青秀の遺伝心理が表れる。

このように、外見からは知ることができない「心理」遺伝（内面の遺伝）を、精神科学の理論で説明するのとはまた別の位相から語る方法として、外見の特徴から内面を見出せる術として流行していた骨相学がここで用いられたのではないだろうか。

そして作中の骨相学は「脳頭蓋」から性格をみるという、やや分かりづらい本来の骨相学を離れ、巷間で流行している人相術的「骨相学」に近づいている。さらには人種別「骨相学」を取り入れて、中国人祖先の心理遺伝を受け継いでいるだけでなく様々な人種の寄り合わせであるという設定に説得力を与えようとしている。

F・J・ガル創始の骨相学は日本に輸入されてからその純粋な形を失い、人相術、占い、人種観との独特な結びつきをもった。この通俗「骨相学」の活用例が『ドグラ・マグラ』の一場面から窺えよう。

による。旧字体は新字体に改め、ルビは適宜省略した。傍線は全て稿者による。

（立教大学大学院前期課程修了生）

【注】

1 『世界大百科事典』平凡社、一九八八・三〜四
2 ウィルレム・チャンブル、ロベルト・チャンブル編、文部省
3 『明治大正人物事典　Ⅱ』日外アソシエーツ、二〇一一・七
4 寺田精一『ロンブローゾ犯罪人論』巌松堂書店、一九一七・九
5 『読売新聞』一九三三・二・二七、朝刊
6 同右、一九三三・三・四、朝刊
7 同右、一九三三・三・五、朝刊
8 同右、一九三三・四・三、朝刊
9 『新英和大辞典』研究社、一九八〇
10 「胡人」とは、古代中国人が用いた塞外人の汎称。この胡人の血が混じっているというのは、一郎の祖先・呉青秀が胡人であったことを仄めかしているのではないだろうか。青秀の生きた玄宗皇帝の時代は西アジアのソグド人やペルシアの西域人も胡人と呼ばれたのだが、作中で玄宗皇帝に対し「謀反を起した」と言及される安禄山はソグド系であった。またソグド人は「中国国内での通商活動」や「西方の文物の中国への導入」などの活動をしており、決して「少数のものめずらしい外国人ではなかった」ようだ（『アジアの歴史と文化8［中央アジア史］』竺沙雅章、同朋社、一九九九・四）。この問題は今後の研究の課題としたい。

付記

作品の引用は『ドグラ・マグラ　覆刻』（沖積舎・一九九五・八）